

手元にあるもので凌ぐ智慧

今月号の論考は、バイオエコノミーとBCPの二本立てである。どちらも日本人がある意味で得意な分野ではないだろうか。

バイオエコノミーには決まった定義はないそうだが、生命の働きを活かす、あるいはバイオマスを優先して材料として利活用し、全体として循環している経済・社会、と理解しており、私にとってバイオエコノミーは循環型社会と通底する。

域外から極力持ち込まず、そこにあるものを最大限活用するということでもあり、長年にわたり鎖国しつつも相応の規模の経済を運営していた日本には経験値がある。生きとし生けるものへの敬愛も作用してか、動植物由来の資源（当時はほぼそののみ）を余すところなく利用していた。同じ時代、資源と市場を域外に求め、グロスでの成長を志向してきた西洋は、解をバウングリーの外側に求めてきた。ロスを排することでネットの物質収支を追求してきた日本に循環型あるいはバイオエコノミーでは優位があるかもしれないと思う所以だ。

今月号の藤島論文も、バイオエコノミーでは日本が先行しうることなど指摘していることを紹介しておきたい。

BCPIは、外部からの支援が得にくい時間帯をどうにかやり過ごす手順をあらかじめ整えるものと理解している。ヒトもモノも手元にあるものだけで事態の悪化をなんとか食い止め、早期復旧につなげる。災害時の踏ん張りは日本人のお家芸でもある。東日本大震災時には未曾有の大災害を前に整齊と対応する日本人の姿は諸外国を驚嘆させたほどだ。最近ではコロナ禍でのサプライチェーン寸断も経験したが、混乱は諸外国対比では抑制された。

野場論文は、農業分野におけるBCPでの連携先拡大などの質的進化を紹介している。

日本人の得意領域といったが、課題もあるかもしれない。

一つはコストへの配慮。バイオエコノミーもBCPも、コスト軸を取払って割切って進むという具合になりがちだが、それでは持続性や通用度は低下する。お家芸として諸外国に広める際に、経済的な観点は不可欠でもある。

二つ目は発展性か。バイオエコノミーは、石油代替でよしとせず、農林水産業が新たな時代の基幹産業となり、社会に求められるあらゆる原料・エネルギー源を供給する、位の発想があってもよいかもしれない。藤島論文はその点についても言及しており、意を強くしているところ。BCPについても、ここぞというときの集中力はすごいのだが、のど元過ぎれば、いなりやすい。もっとサプライチェーンの前後の方との連携を深めておけば、とか、本当は検討したほうが良いのだが、人手不足の折、そのような時間は与えられないことの方が多いかもしれない。今後のさらなる整備への期待も野場論文には込められている。

こう書いてくると、二つとも経営そのものにも通じるような気がしてきた。短期では具体的に手堅く、長期では発想を開放して大胆に飛躍。肝に銘じたい。

（株）農林中金総合研究所 常務執行役員 小畑秀樹・おばた ひでき